

## 真理の時制をめぐる論争 ——メラーとプリーストに即して——

梶本 尚敏

### はじめに

現代の時間論においては、過去、現在、未来の存在論的地位をめぐってA系列主義(時制理論)とB系列主義(無時制理論)という2つの立場が論争を繰り返している。A系列やB系列の説明は後述することにして、彼らの論争点は主に次の2つに分けられる。

- (1) A系列は矛盾しているのか
- (2) 時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか

B系列主義者であるメラーによるこれらの論点についての議論は強力なものであり、多くのB系列主義者によって支持されてきた。しかしこのメラーの議論は、A系列主義者たちによって様々な形で反論されている。本稿の目的は、A系列主義とB系列主義が争っている2つの論点(1)および(2)を確認したうえで、その2つの論点についての論争の一例としてA系列主義者であるプリーストとメラーによる論争を俯瞰することである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、1章で現代の時間論の論争の基本的な枠組みとなっているA系列主義とB系列主義、および両者が争っている2つの論点について説明する。続く2章では、その2つの論点をめぐるメラーとプリーストの論争を見ていく。

### 1. 背景

この章では、現代の時間論の論争が持つ背景を説明していく。まず、現代の

時間論の代表的な2つの立場であるA系列主義とB系列主義について説明し(1.1節), その後A系列主義とB系列主義の間の2つの論争点を簡単に述べていく(1.2節, 1.3節).

### 1.1 A系列とB系列

A系列とB系列とは, マクタガート[McTaggart, 1908 and 1927]が自身の時間の非実在の証明の中で導入した2つの時間把握である. A系列は「過去である」, 「現在である」, 「未来である」などといった時制的な系列である. A系列的な時間把握の例としては, 以下のものがあげられる.

「今, 私は昼食を食べている」(「私が昼食を食べているのは現在である」).

「かつて『ミッドウェーの海戦』で日本が大敗した」(「『ミッドウェーの海戦』における日本の敗北は過去である」).

A系列的な時間把握は現在がどこにあるかに応じて変化する. たとえば, ミッドウェーの海戦は1932年6月5日には未来であり, 1942年6月5日には現在であり, 1952年6月5日には過去である. これに対して, B系列は出来事間の前後関係や日付などを基準とする無時制的な時間把握である. B系列的な時間把握の例としては次のようなものがあげられる.

「ミッドウェーの海戦は満州事変より後である」.

「ミッドウェーの海戦は1942年6月5日である」.

A系列的な時間把握とは異なり, B系列的な時間把握は現在がどこにあろうが変わらない. 現在がどこにあろうが, ミッドウェーの海戦が1942年6月5日であるという事実は変わらないのである.

このマクタガートの時間区分から生じた二つの立場がA系列主義とB系列主義である. A系列主義はA系列が時間にとって本質的であり, 時間の経過が実在すると考える. また, A系列主義においては過去, 現在, 未来の間に存在論的地位の違いがある. それに対し, B系列主義はB系列が時間にとって本質

的であり、時間の経過は実在しないと考える。また、B系列主義においては過去、現在、未来の間に存在論的地位の違いはない。両者を図示しておく、次のようになる。

	時間にとって 本質的	時間の経過	時間の存在論 的地位
A系列主義 (時制理論)	A系列(過去, 現在, 未来)	実在する	現在のみが実 在し, 過去, 未来 は実在しない(現 在主義)
			過去, 現在が実 在し, 未来は実在 しない(成長プロ ック説)
B系列主義 (無時制理論)	B系列(～より 前/後, ～と同 時, 2011年11月 18日)	実在しない	過去, 現在, 未 来は等しく実在 する(永遠主義)

さて、現代の時間論におけるA系列主義とB系列主義の主な論争点は「A系列は矛盾しているのか」と「時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか」という2つに分けられる。次の2節でそれぞれの論点について説明していく。

### 1.2 A系列は矛盾しているのか

この節では、「A系列は矛盾しているのか」という論点について述べていく。

現代の時間論の論争において、この論点は「マクタガート[McTaggart, 1908 and 1927]のパラドックスは成立しているのか」という形で議論されてきた。マクタガートが‘The Unreality of Time’の中で示したこのパラドックスは、以下のよう  
に整理される。

1. 出来事は「過去」「現在」「未来」という3つのA特性を全て持たなくてはならない。ある出来事が現在であるなら、それは過去であるし、未来である。
2. (A特性にとって変化は本質的であるので)「過去」「現在」「未来」の3つのA特性は、変化を表すために、互いに排他的でなければならない。
3. A特性が出来事に適用されるならば、その出来事は互いに排他的な3つの特性を全て持たなくてはならない。したがって、A特性は矛盾である。

ここで、マクタガートが想定した批判とそれに対する反論を1つ書いておく。まず、マクタガートが想定した批判というのは、出来事は現在、過去、未来という3つのA特性を同時に持つわけではないから、矛盾は生じないというものである。「出来事Mは現在であり、未来であり、過去である」ではなく、「出来事Mは未来であったのであり、現在であり、過去となる」こそが正しいのである。

マクタガートはこれに対して2つの方法で反論を加えているが、ここではそのうち論争的になってきた1つの方法のみを紹介する。想定された批判者は、「出来事Mは過去、現在、未来の3つの特性を全て持つ」という命題を、「出来事Mは(かつては)未来だったが、(今は)現在であり、(これから)過去となる」と書き換えている。マクタガートは、さらにこれを「出来事Mは過去の時点では未来であり、現在の時点では現在であり、未来の時点では過去である」と書き換える。つまり、想定された批判者はA系列的な表現をもう1回導入して、時制的な視点の区別を明確化すれば矛盾は回避できると考えていることになる。しかし、このA系列を再導入するということは大きな問題を抱えている。というのは、A系列の再導入によって回避されたはずの矛盾が再導入されたA系列の各時点に再び戻ってくるからである。したがって、この反論は悪循環に陥ることになってしまい、成立しない。

マクタガート自身は、時間に特有な変化を描写しうるA系列こそが時間にとって本質的だと考えた。そして時間にとって本質的なA系列が矛盾しているのだから時間も矛盾しており、それゆえに時間は実在しないと結論した。A系列

主義者も B 系列主義者もマクタガートの「時間は実在しない」という結論を拒否する点では同じであるが、その結論を拒否する過程において異なる。A 系列主義者は A 系列が時間にとって本質的であることは認めるが、A 系列が矛盾しているというマクタガートのパラドックスは成立しておらず、それゆえ時間は実在すると主張する。それに対し、B 系列主義者は A 系列が矛盾しているというマクタガートのパラドックスは成立しているが、B 系列のほうが時間にとって本質的であり、それゆえに時間は実在すると主張する。以上が、A 系列主義と B 系列主義が「A 系列は矛盾しているのか」について争う背景である。

### 1.3 時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか

この節では、まず初期の B 系列主義者の「時制的な文を無時制的な文に翻訳する」という試みが何故失敗したのかを見たうえで、現代の時間論で議論されている「時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか」という論点について述べていく。

ラッセル [Russell, 1915], スマート [Smart, 1963] などの初期の B 系列主義者は、時制表現を含む A 系列的な文は無時制的な B 系列的な文に翻訳可能であり、それゆえに B 系列のほうが A 系列よりも根本的であると主張した。たとえば、時点  $t$  に言われた「E は過去」は「E は  $t$  よりも前」に、時点  $t$  に言われる「E は現在」は「E は  $t$  と同時」に、時点  $t$  に言われた「E は未来」は「E は  $t$  よりも後」に書き換えられる。「過去」、「現在」、「未来」という時制的な表現は「より前」、「同時」、「より後」という無時制的な表現に書き換えられると考えたのである。

しかし、初期の B 系列主義者の試みには根本的な問題があることが判明する。というのも、ペリー [Perry, 1979] をはじめとする多くの言語哲学者たちによって指標詞を含む文は指標詞を含まない文に翻訳不可能であることが主張されるようになったからである。たとえば、「今発表中である」という文を「2011 年 11 月 18 日に発表中である」という文に書き換えたとしよう。一見これはうまく言い換えられているように思われるが、前者に含まれている「今 = 2011 年 11 月 18 日」という情報が後者では抜け落ちてしまっている。このように指標詞には消去不可能な言語的意味があり、それゆえに時制的な文を無時制的な文に翻訳

しようとする初期の B 系列主義者の試みは不可能なのである。

初期の B 系列主義者の時制的な文を無時制的な文に翻訳するという試みは失敗に終わった。しかし、その後「新しい B 系列主義」と呼ばれる立場が出てくる。この立場は、時制表現を無時制表現に翻訳することが不可能であることを認める。しかし、時制表現を無時制表現に書き換えられないのは単に言語の意味にかかわる問題であって、そこに存在論的な含意はないと主張する。時制表現と無時制表現は意味に関しては違っているかもしれないが、世界で起っている共通の 1 つの出来事を指示しているのである。たとえば、2011 年 11 月 18 日に発せられた「今発表中である」という時制的表現と「2011 年 11 月 18 日に発表中である」という無時制的表現は、どちらも 2011 年 11 月 18 日の私の発表を指示する。そして新しい B 系列主義は時制表現が存在論的な含意を持っていないことを示すために、時制的な文の真理条件が無時制的な文によって与えられることを示そうとする。ある事実が存在するとは世界についてのある文を真にするということ、言い換えればその文の真理条件になることである。もし時制的な文の真理条件が無時制的な文によって与えられるなら、無時制的な(B 系列的な)事実のみが存在するのであり、時制的な(A 系列的な)事実是不必要であるということが帰結するのだ。

こうして A 系列主義者と B 系列主義者は「時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか」という論点で争うことになった。A 系列主義者は時制的な文の真理条件は無時制的な文では与えられないと証明することで、時制的な事実(A 系列的な事実)が必要不可欠であることを示そうとする。それに対し、B 系列主義者は時制的な文の真理条件が無時制的な文で与えられると証明することで、時制的な事実(A 系列的な事実)は不必要であり、無時制的な事実(B 系列的な事実)のみが存在することを示そうとする。

## 2. メラー vs. プリースト

1 章では、A 系列主義と B 系列主義が(1) A 系列は矛盾しているのか、(2) 時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか、という 2 つの論点で争っているのを見てきた。本章では、その 2 つの論点に関する、メラーとプリー

ストの論争を見ていく。2.1 章では *Real Time II* (1998)でのメラーの議論を、2.2 章では“Tense and Truth Condition” (1986)でのプリーストの議論を、2.3 章では“Tense’s tenseless truth conditions” (1986)でのメラーの議論を、2.4 章では“Tense, Tense and Tense” (1987)でのプリーストの議論を見ていく。

## 2.1 メラーの議論

1 章でみた2つの論点についてのB系列主義者であるメラー [Mellor, 1981 and 1998] による議論は、後の時間論の論争に大きな影響を与えた。この節では、メラーの議論を見ていく。

メラーはまず、タイプとトークンという区別に訴える。トークンはそれが属するタイプの具体的な事例のことを指す。たとえば、ナポレオンは人間タイプのひとつのトークンである。そして私が発話する「私は存在する」は、「私は存在する」という文タイプの1つのトークン(時空的位置を持つ具体的な発話、思考、筆記など)なのである。そしてメラーはタイプとトークンの区別に基づけば時制を含む文のあらゆるトークンは無時制的に分析可能であると主張する。確かに文タイプとしては時制を含む文と無時制の文は異なるかもしれないが、時制を含む文トークンの真理条件はすべて無時制的な文で与えられる。この区別に基づいたうえで、メラーは時制的な事実が存在しないことを示すために次の2つの主張をする。

- (A) 時制的な文の真理条件は無時制的な事実だけで与えられる
- (B) 時制的な事実で時制的な文の真理条件を与えると矛盾が生じる

なお、(A)は先ほどの論点(2)「時制的な文の真理条件は無時制的な文で与えられるか」と、(B)は(1)「A系列は矛盾しているのか」と対応している。(A)についてまず見ていこう。メラーは、トークンが全て無時制的な事実によって真にされると考えた。彼によれば、無時制的な事実によって与えられる時制的な文の真理条件は次のようになる。

任意の時点  $t$ 、トークン  $u$ 、出来事  $E$  について、

「Eは過去である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eがtより前であるときかつそのときに限る。

「Eは現在である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eがtと同時であるときかつそのときに限る。

「Eは未来である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eがtより後であるときかつそのときに限る。

この真理条件は無時制的な事実によって与えられており、時制的な事実は全く含まれていない。またこの真理条件は全てのトークンに当てはめられるので、時制的な文の真理条件は全て無時制的な事実だけで与えられる。したがって、時制的な事実文の真理条件を説明するために時制的な事実の存在は不必要である。

次に(B)について。時制的な事実によって与えられる時制的な文の真理条件は次のようになる。

任意の時点t, 文トークンu, 出来事Eについて、

(\*) 「Eは過去である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eが過去であるときかつそのときに限る。

「Eは現在である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eが現在であるときかつそのときに限る。

「Eは未来である」の時点tにおける文トークンuが真であるのは、Eが未来であるときかつそのときに限る。

この真理条件は過去、現在、未来であるという時制的な事実を含んでいる。ここで出来事Eを「1815年のワーテルローの戦い」という出来事と仮定しよう。そして2011年現在に「ワーテルローの戦いは過去である」という文トークンuを発話するとして、先ほどの真理条件(\*)が2011年現在に適用されれば、ワーテルローの戦いは過去であるからuは真になる。しかし、この真理条件を1815年以前の時点、例えば1800年に適用したとすると、そのときはまだワーテルローの戦いは過去でなく、それゆえ同じuが偽ということになってしまう。

つまり、u が真かつ偽という矛盾が生じる。u という文トークンは明確に時間的・空間的位置を持つ行為や物であるので、時間を通じて真理値が変わるということはあるが、したがって時制的な文に時制的な事実で真理条件を与えると矛盾が生じる。

この節での議論をまとめておく。メラーは(A)時制的な文の真理条件は、無時制的な事実だけで与えられる、(B)時制的な事実で時制的な文の真理条件を与えると矛盾が生じるという2点を示した。(A)からオッカムの剃刀により時制的な事実が必要ないことが示され、(B)から時制的な事実が矛盾を生じさせることが示される。したがって、時制的な事実が存在しないことが帰結する。

## 2.2 “Tense and Truth Condition”におけるプリーストの議論

メラーの議論は強力なものであり、多くのB系列主義者によって支持された。その一方で、A系列主義者はこのメラーの議論に対し、様々な反論を試みてきた。この節では、その中でもプリースト [Priest, 1986] の“Tense and Truth Condition”での議論を見ていく。

プリーストは、メラーの結論は「真である」の部分が無時制であるという暗黙の前提に基づいていると主張する。「真である」の部分が時制的か無時制的であるかに関して、独立した主張を与えない限り、メラーの議論は成立しないのである。そしてプリーストは、もし「真である」が時制的であるなら無時制的な事実が存在しないことが証明できると主張し、次の二つの議論を展開する。

- (A) 無時制的な文の真理条件は時制的な事実だけで与えられる
- (B) 無時制的な事実で無時制的な文の真理条件を与えると矛盾が生じる

(A)から見ていこう。まず、プリーストはあらゆる動詞Vに対して、「永遠にVである」という動詞を考える。これは以下のように定義される。

「永遠にVである」≡「Vだった」あるいは「Vである」あるいは「Vであろう」

この「永遠にVである」はある時点で真であるなら永遠に真であるし、また

時制的な動詞である。この時、たとえば「ワーテルローの戦いは 1815 年に起きる」という無時制的な文に、「永遠に V である」を用いて次のように真理条件を与えることができる。

「ワーテルローの戦いは 1815 年に起きる」が真であるのは、ワーテルローの戦いが 1815 年に永遠に起きるときかつそのときに限る。

すべての時点において「ワーテルローの戦いが 1815 年に起きる」と「ワーテルローの戦いが 1815 年に永遠に起きる」は同じ真理値を持つので、この真理条件は正しい。また、この真理条件は時制的な事実によって与えられており、無時制的な事実は全く含まれていない。この真理条件は全てのトークンに当てはめられるので、無時制的な文の真理条件は全て時制的な事実だけで与えられることになり、したがって無時制的な事実文の真理条件を説明するために無時制的な事実の存在は不必要である。

次に (B') について。「ワーテルローの戦いが 1815 年に起きる」の文トークン  $u$  に無時制的な真理条件を与えると次のようになる。

$u$  が真であるのは、ワーテルローの戦いが 1815 年に起きるときかつそのときに限る。

この無時制な真理条件を 2011 年現在において適用すると、 $u$  は真である。ここで注意してほしいのは、この真理条件の中の「真である」が時制的であるため、 $u$  の真理値は時間を通じて変化する、ということである。したがって  $u$  が 1800 年以前に発せられているとき、 $u$  は偽である。しかし、上の無時制的な真理条件における「ワーテルローの戦いが 1815 年に起きる」は常に真であるため、無時制的な真理条件を適用すると  $u$  が真であることが帰結する。 $u$  は真かつ偽になるが、これは矛盾である。以上より、無時制的な事実で無時制的な文トークン  $u$  の真理条件を与えると矛盾が生じることが証明された。

この節での議論をまとめておく。ブリストは (A') 無時制的な文の真理条件は、時制的な事実だけで与えられる、(B') 無時制的な事実で無時制的な文の真

理条件を与えると矛盾が生じるという二つを示した。(A')からオッカムの剃刀により無時制的な事実が必要ないことが示され、(B')から無時制的な事実が矛盾を生じさせることが示される。したがって、無時制的な事実が存在しないことが帰結する。このプリーストの議論はメラーの議論と並行的であり、そこからプリーストは、メラーの議論が成立するためには「真である」が無時制的であるかについて独立な議論が必要であると結論する。

### 2.3 "Tense's tenseless truth conditions"におけるメラーの議論

以上のプリーストの議論に対し、メラー [Mellor, 1986] は以下の2つの観点から反論する。

- (i) プリーストの「永遠に～である」は時制化されていない
- (ii) 「真である」が時制化されていないことについての独立な議論は存在する

(i)から見ていこう。まず、メラーは動詞の文法的な時制と、実在の客観的な特徴、つまり過去、現在、未来、明日、そして今などといったマクタガートのA系列を区別する。便宜上、前者を時制、後者を時制と表記しよう。時制と時制はかならずしも一致するわけではない。すべての言語が時制を持っているわけではないし、また日本語の時制も必ず時制と一致しているわけではない。「明日彼は死ぬ」という文を考えてみると、「死ぬ」という動詞は時制化されていない。しかし、明日は未来時制であり、またこの文の時制は「明日」によって固定されている。したがってこの文は未来時制であるし、また私たちが通常そのように解釈している。以上のような時制と時制の区別を踏まえたうえで、メラーは時制的な事実が存在するかどうかについての論争において重要なのは時制なのであり、プリーストの「永遠に～である」は時制化されていないと批判する。というのも、プリーストの用いている「永遠に～である」は時制とともに語尾変化をするわけではなく、それゆえに時制を反映していないと考えられるからである。

次に(ii)について。プリーストの批判に対し、メラーは「真である」は時制

化されていないと応答したうえで、「真である」が文タイプである場合と文トークンである場合の2つに分けて議論をしていく。まず、「真である」が文タイプであるならば、文タイプは明らかにA系列的な位置を持っていないので、時制化されない。

次に「真である」が文トークンである場合を考えてみよう。文トークンはA系列的な位置を持っているので、時制化されているかもしれない。メラーはさらに、その文トークンの真理値がワーテルローの戦いなどといった出来事との間のB系列的な関係(前後関係)に依存している場合と、出来事自身の変化する時制に依存している場合の二通りに分ける。文トークンの真理値がその文トークンと出来事のB系列的な関係に依存しているならば「真である」は時制化されていないし、出来事自身の変化する時制に依存しているならば「真である」は時制化されている。したがって検討する必要があるのは、後者の場合である。

ここでメラーは、出来事自身の変化する時制に依存しているならば奇妙な事態が帰結してしまうと主張する。仮に出来事をジョンの死、ジョンの死よりも前の時点で発せられた「ジョンが死んだ」という文トークンをS-、ジョンの死よりも後の時点で発せられた「ジョンが死んだ」という文トークンをS+としよう。文トークンの真理値が出来事の変化する時制に依存しているならば、S-とS+の真理値はジョンの死ぬ前には偽であり、ジョンの死後には真という風に、時間を通じて変化するのだ。これはかなり奇妙な事態である。というのも、ジョンの死という出来事が彼の死についての早とちりな言明を死後に真にするという事態が生じているのだから。メラーはこの事態の奇妙さを「人称的、空間的アナロジーにおいて、自分が素面であるという理由で私があなたの『私は酔っぱらっている』という発話を論駁したり、ケンブリッジがここからは60マイルではないという理由でロンドンの『ケンブリッジまで60マイル』という道路標識を論駁することのようだ」と表現している。もし文トークンの真理値が出来事とトークンのB系列的な関係に依存しているならば、S-とS+の真理値は常に一定であり、時間を通じて変化することもない。以上の理由から、メラーは「真である」が文トークンであるとしても、その文トークンの真理値は出来事とその文トークンのB系列的な関係に依存しているのであり、それゆえに時制化されていないと結論する。

この節での議論をまとめておく。メラーはプリーストの議論に対し、(i)プリーストの「永遠に～である」は時制化されていない、(ii)「真である」が時制化されていないことに関する独立な議論は存在する、の2つによって応答した。以上のことから「真である」は時制化されておらず、それゆえに時制的な事実が存在しないというメラーの議論が成立することが帰結する。

#### 2.4 “Tense, Tense and Tense” におけるプリーストの議論

この節では、2.3 節でのメラーの議論に対するプリーストの再反論を見ていく。プリーストの論点は以下の2つにまとめられる。

- (i) プリーストの「永遠に～である」は時制化されている
- (ii) 「真である」が時制化されていないことについての独立な議論は成功していない

(i)から見ていく。時制と時制が常に対応しているわけではないことはプリーストも認める。しかし、「永遠に～である」に関しては時制化されていると主張する。彼がそのように主張する根拠は、「永遠に～である」が「Vだった」、「Vである」、「Vであろう」という時制化された動詞の選言であることである。プリーストによれば、複合的な文の真理値はそれを構成する文と同じ事実によって決定される。したがって時制化された文から構成されている複合的な文は時制化されているのであり、それゆえに時制化された動詞から構成されている「永遠に～である」も時制化されているのである。

次に(ii)について。プリーストもメラー同様、「真である」がタイプである場合とトークンである場合の2つに分けて反論している。まず、「真である」が文タイプである場合に対しては、プリーストは明らかに時制化された解釈が1つあると主張する。それは「文タイプによって具体的にあげられた事態は特定のA系列的な位置、つまり今を持つ」というものである。たとえば、「太陽が輝く」が真であるのは、太陽が輝いているのが今現実化されているときかつそのときに限る。

続いて「真である」が文トークンである場合について。プリーストは、「文

トークンの真理値が時間を通じて真理値を変化させることが奇妙な事態である」というメラーの主張に反論を加える。メラーはジョンの死という出来事が彼の死についての早とちりな言明を死後に真にするという事態が奇妙であると主張したが、プリーストによればこれは決して奇妙な事態ではない。というのも、ジョンの死についての言明が早とちりになってしまっているのは、その早とちりな言明がなされた時点において偽だったということなのであり、新たに起きることではない。そうである以上、文トークンの真理値が時間を通じて真理値を変化させることは、真理が時制化されていることからの当然の帰結なのである。

本節での議論をまとめておく。プリーストはメラーに対し、(i)プリーストの「永遠に～である」は時制化されている、(ii)「真である」が時制化されていないことについての独立な証拠は成功していない、の2つによって応答する。以上より、「真である」が時制化されているという議論は存在せず、それゆえに時制化された事実が存在しないというメラーの主張も成立していないことが帰結する。

### 3. 結語

最後に、本稿で示したことを確認したうえで、自分の見解について簡単に述べておく。

本稿ではまず1章で現代の時間論の主な2つの論争点について確認した。そして2章において、その2つの論争点をめぐるメラーとプリーストの論争を見ていった。ここで、この論争についての自分自身の見解を簡単に述べておくと、メラーの議論が「真理が時制化されていない」という前提のもとに成り立つ議論であるというプリーストの主張は確かに正しいが、彼の「時制化された真理」という概念はかなり受け入れがたいものであると考える。というのも、「時制化された真理」のもとでは真理値リンクが保たれないからである。真理値リンクとは、時点をまたいだ言明の間には体系的な真理値のつながりがあるという考えである。例えば、今発話される「私は今テニスの試合に出場している」と一年後に発話される「私は一年前にテニスの試合に出場していた」という言明

の真理値は一致していなければならないはずである。ブリーストの「時制化された真理」は少なくともこの真理値リンクを破るという点でかなり受け入れがたく、仮に破るのであるならそれ相応の理由を述べる必要があるのではないかと私は考える、とはいえ、この点に関しては本稿では示唆するのみにとどめておき、また別の機会に論じたいと思う。

### 参考文献

- J. J. C. Smart (1963) *Philosophy and Scientific Realism*, London, Routledge & Kegan Paul
- McTaggart, J. M. E. (1908) "The Unreality of Time", *Mind*, 17: 457–84.  
——(1927) *The Nature of Existence*, Volume II, ed. C. D. Broad, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mellor, D. H. (1981) *Real Time*, Cambridge: Cambridge University Press.  
——(1986) "Tense's tenseless Truth Conditions", *Analysis*, 46: 167–72.  
——(1998) *Real Time II*, London: Routledge.
- Perry, J. (1979) "The Problem of the Essential Indexical", *Nous*, 13: 3–21.
- Priest, G (1986) "Tense and Truth Conditions", *Analysis*, 46: 162–6.  
——(1987) "Tense, Tense and Tense", *Analysis*, 47: 184–7.
- Russell, Bertrand (1915) "On the Experience of Time", *Monist* 25: 212–33
- 山田貴裕(2010)「反実在論と「真理値リンク」問題」, 京都大学哲学研究室編, 哲学論叢 37号, 49–60頁

(かじもと なおゆき／京都大学哲学研究室)